
仲間思いの刀使い

雨月 夜葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仲間思いの刀使い

【Nコード】

N9966Y

【作者名】

雨月 夜葉

【あらすじ】

暇だからさらにギルティクラウンの二次創作

仲間（前書き）

OP好きだ。

仲間

此処は、葬儀社の基地である。

ガイと呼ばれるリーダーを起点として起きた組織だ。

政府と戦う葬儀社は、世間では、テロと呼ばれる行為をしている。

俺達、葬儀社が正義だと信じている。

そんな葬儀社には、仲間思いの刀使いがいた。銃のある今の時代に刀などと言うアンティークを戦場に持ち出す人間は、いないだろう。

葬儀社に女子供は、以外と多いそのなかでも若い刀使いは、何故葬儀社にいるかわからない

いつの間にか溶け込んでいた。

そんな刀使いは、何時でも他人を気にした。

「おい！いのりー！」

「んっ？……何？」

「ちょっと座れ…腕見せろ…」

いのりの腕には、弾丸の掠った跡が付いていた。

刀使いは、懐から一卷きの包帯を出した。それは、いい素材を使った高級な包帯だった。それは、怪我の多いいのりが一番わかった。

「ホントに包帯の代金をいくらかける気だ？いのり」

「リヨウ……心配しすぎ」

「女の子なんだから肌は、大事にきなさい」

パスツといのりの頭に手を置いて微笑んだ。

「……うん」

いのりは、頷いてくれた。

「あまり怪我するなよ。包帯代だって安くねえんだからな！」

いのりは、トタトタと廊下の角を曲がって消えた。

自室に戻ろうとしたリヨウを待っていたのは、

「……………」

猫のような格好をした少女だった。

目的は、何時も通りのハイスpekノートパソコンだろう。ちなみにリヨウの自作である。

「何やってんだ？ツグミ？」

リヨウは、額に青筋を入れながら言つと

「部屋のかたづけ？」

「疑問を疑問で返すな」

ゴツン！と固い拳がツグミの頭に落とされた。

「ぎゃにゃ！」

お前は、猫か？

ツグミは、プログラムやハッキングに関しては、天才だが創作があまり得意ではない。

「ほれ」

ノートパソコンを保護カバーに包み渡した。

「いいの？」

上目遣いで聞いてくる。

「んっいらないのか？」

恥ずかしくなって味気なく渡した。

「ありがとうリヨウ」

「はいはい勝手に人の部屋に入るなよ？」

「分かってるわよ」

自室を汚くして帰ったツグミの件を諦めて自室で寝ていると
自室を汚くして帰ったツグミの件を諦めて自室で寝ていると
「リヨウ？ げっ何この部屋！」

「俺がこんな事するか？」

車椅子に乗るアヤセだった。アヤセは、さすがに車椅子で物が散ら
かった部屋に入ってこなかった。

「あれっ？ ノートパソコンは？ まさかツグミがやったの？」

「他に誰がいる？」

昔からノートパソコンノートパソコン煩かったからなツグミは、何
故か欲しかった。

「手伝おうか？」

「わりいな」

ツグミは、隠してあったノートパソコンを探したのかやけに物が散
らかっていた。しかも男物のパンツやらなんやらが出てきた。
冷蔵庫から安物のコーラを出した。

「ごめんコーラしかねえ」

アヤセは、コーラを開けて飲んで

「まあいいわ。リヨウの今回の作成やばいんでしょ？」

「……………情報は？」

「ツグミのハッキング」

リヨウは、ハア〜とため息を吐いて

「仲間内でハッキングしてどうすんの？」

「知的好奇心と言って欲しいわね」

アヤセは、コーラをごみ袋に捨てて

「たまには、頼りなさいよ」

「すまん」

そんなやりとりをしながら少しずつ自室を戻して行った。

アヤセとは、そこで別れて愛用の日本刀『黒燕』を腰に付けた。そこには、優しい刀使いは、存在しなかった。ただ殺す為に動く鬼人になっていた。その姿は、誰かに見られていたのには、気づかない

「頼むよ母さん」

黒燕にそう語りかけ専用ポーチを腰にくくり付けた。

葬儀社の作戦室にリヨウは、着くとそこには、ガイがただ一人その空間にいた。

「行けるか？」

「もちろん」

ガイとは、古い仲だ。母親の研究の近くにいた人間だからだ。今回の作戦は、陽動である。それも大規模でかなり危険な場所に単独で先攻する。明らかに死ぬ。だが信じて疑わなかった。葬儀社がガイが俺を殺すわけではない

「これは、あくまで自己推薦だ。任せとけ」

「頼む」

【細胞兵器開発課研究所】

目的は、新型兵器のデータ入手もしくは、強奪だ。使われた場合破壊殲滅が許可されている。

正門には、黒いコートを着ている怪しい男が現れた。その腰には、日本刀と質素な拳銃が一丁の軽装だ。

当然戦いに来ているつもりらしいがこの時代刀なんて使う人間なんてただのすてごまくらいだ。

だが全ての兵士は、その刀使いの気に恐怖を覚えた。

ライオンに睨まれたウサギのように震えた。

刀使いは、走り出した。黒く染まった刀を握り圧倒的な存在感で…

恐怖した兵士は、持っていた銃を撃つが

キン！

そのスピードは、光速だった。銃より早く燕のように綺麗に弾丸を切り裂いた。いや、ただ刀を添えただけで切っては、いない

『正面ゲート敵1現在進行中繰り返す…』

ジリリリリ！と遂に本格的な刀使いの最後が始まった。ただ平穩の為にただ仲間の為に刀を抜いた。

彼は、兵士の見えない速度で首を斬り飛ばし雄叫びを上げて叫ぶ。

「ただ守りたいだけなのに！」

兵士の首を切り取り刀は、さらに黒く染まる。

『止まらない！爆撃だ。ぶっ飛ばせ！』

させるか！！

さらに脚に力を入れた。その速度は、既に人外である。RPGを持った兵士を斬り飛ばしさらにポーチから閃光弾を投げた。

ポンツと軽く弾ける音がして当たりに眩しい閃光が放たれる。

回りの兵士は、もろに閃光弾をくらい怯んでいる隙に窓ガラスから部屋に侵入した。そこは、酷いなんてもんじゃないそこには、結晶のような物が侵食した人間の姿だった。解剖されてさらには、剥製にされている。

一カ所に留まっているのは、危険なので通気口から研究所を回る事にした。ほとんど結晶化した人間か医者のような格好をした人間ばかりだった。

しばらく通気口を進むとガイの言った通り例の細胞兵器専用らしいパソコンの前に行った。

USBにオリジナルハッキングウイルスを入らせた。

残り60秒…

残り50秒……

「動くな！包囲されてるぞ投降しろ！」

シャラン…

ゆつくりと日本刀『黒燕』を抜いた。「反抗意識を確認！撃て！」
ありとあらゆる弾丸がリョウに飛んだ。

残り10秒……………

確実性を求めるなら覚悟を決めなければならない。味方は、いない
弾丸を刀で弾き続ける。だが限界が近い…光速で連続で刀を振るの

は、無理がある。

残り5秒……

右脚に弾丸が刺さる。

残り4秒……

左手に弾丸が刺さる。

残り3秒……

左手から刀が弾け飛ぶ。そして

タン！

胸に弾丸が刺さる。電子音がして細胞兵器のデータが葬儀社本部に届く。

「後は、任せた……みんな……」

仲間（後書き）

CD買った。ちやっ
た。

虚空（前書き）

文才をください m () m

虚空

リヨウが潜入して一日……

「何でリヨウ一人に行かせたの!!」

ツグミは、ガイに抗議に走った。ハッキングして見た作戦は、作戦なんて言えない物だった。部屋に入っただのは、準備不足で行かせない為に部屋に入っただのにあまりに何時も通りなりヨウを見てそれはないと踏んで諦めた。だが彼は、昨日から帰ってこない。その意味は、死亡と言うことになる。

「あれは、本人の意思だ。自己推薦だったんだ。俺から言うことはない」

「でも一人で特攻？ふざけないで!!」

作戦室にツグミの大声が響く。彼女の考えは、もっともだがあの細胞兵器は、かなり凄い力を持っている。誰も悪くないが思わずツグミは、ガイに言い寄った。

作戦室の扉が開き来年の細胞奪取計画の案の会議だ。来年の今頃に細胞兵器が出来る。リヨウのデータのお陰で…

「さつきから大声だしてどうした？」

「ガイがキレルぜ？」

「一仕事しますかね!」

といい入るここの兵士達は、まるでリヨウを忘れたような言い方だった。

「リヨウが死んだのよ？これが落ちていてられる！？」

するとシーンとそいつらは、黙ってしまった。

「まさかみんな知ってたの？」

またもや彼等は、黙りこんだ。もうこの時点で知っていたのは、わかる。

「何でリヨウが死んだのに平然としてられるの！？」

すると左の会議室の扉からいのりが出てきた。

「リヨウが……死んだ……？」

いのりも泣きそうな顔をしていた。いのりは、なんやかんやでリヨウを尊敬し兄のような関係だった。

「いのりは、知ってたの？」

いのりは、顔を横に振った。

「お前達には、伝えるなと口止めされてな」

ガイも顔を背ける。彼も大分無理したのが伝わって来る。

「アヤセは、感づいていたようだがな」

アヤセは、最後に片付けに手伝って最後に立ち会っていた。

ツグミにしてみればいのりと同じでリヨウを兄のように見ていた。

だから私達は、立ち上がらなければならない死んで行ったりリヨウの
為にも細胞兵器奪取に全力を尽くそう。ただ優しかった刀使いの為
に…

虚空（後書き）

木曜日になれ

（ ）

記憶（前書き）

二つ同時進行で書いてたら間違えた。

記憶

いのり…それが私の名前だった。

私は、少なからず絶望していた。あまり表情は、変わってないらしいが私は、これが兄なのかな…って人がいた。その人は、昨日任務で死んだらしい。私の腕には、兄…リヨウが巻いた高級な包帯が巻いてあった。リヨウは、自分が傷ついてもケロッとしているが仲間の傷に極度に反応した。

私は、よく怪我をするらしいリヨウいわく女の子なんだから肌を大事にしろ。と言っていた。

私がリヨウに出会ったのは、葬儀社に入って三日立った頃だった。歩き回る事が許可された私は、歩き回っていた。

「お嬢ちゃん危ないよ」

「おいお嬢ちゃん」

「お嬢ちゃん戦うのかい？」

違う私の名前は…！

「ねえ名前は？」

この時から私は、兄…リヨウを見つけた。

「……いのり…」

「いのりかぁ。いい名前だね。」

「うん……」

私は、初めて名前を名乗れた。今ここに居るのは、彼のお陰だった。私の中では、彼は、太陽と表してよかった。私は、リヨウの意思を継ぐ……

【ある部屋の一角】

少年は、何もわからない……ただ何かを成すこと出来た。そう感じた。ただ分かるのは、今の居場所がベッドの上な事だ。

ガチャとドアが開いた。そこには、少年が一人入ってきた。

「お…起きたか。僕の名前は、シュウだ。よろしくな」

「…俺は、……誰だ？」

「記憶喪失なのか？」

「わからないただ何かが待ってる気がする。」

「僕の母がこれ読めってさ」

【貴方は、こちらで観察されている人間です。君には、特異な力があるが一部の記憶が飛んでいる可能性があります。しばらく家に住んでください。なお腕輪を外したら電気ショックで死ぬ可能性あります。】

「家に居ろって事か？」

「僕が荷物預かってるよ。」

シュウの手に持った小さな荷物には、携帯食料とミネラルウォーターと【リヨウ】と掛かれたポーチだった。

「リヨウ？俺の名前？」

「よろしくなリヨウ」

「ああよろしくな」

記憶（後書き）

神よ文才を！つ！

始まり（前書き）

何か転生のほうのPVが高いよ

始まり

時2039年

ここでは、10年前に突如繁栄した

【アポカリプスウィルス】の蔓延によってロストクリスマスと言う大事件が発生する。日本は、【GHQ】の総治下に置かれる事になった。

俺は、

桜馬 リヨウになり、桜馬 シュウと一緒に暮らしている。シュウも俺も互いに他人と距離をとりお互いは、一緒にいた。やはり一人は、心細い。

晩飯の用意が出来た。シュウは、いつものところだろう。

屋上に行くとシュウは、やはりいた。有名なバンド【エゴイスト】歌をケータイで流していた。

ズキンッ！

エゴイストのいのりの声を聞くと頭が痛くなる。なぜかは、さっぱりわからない。でも何故か懐かしいと思える。

「シュウ！飯！」

やっと気づいたシュウは、こっちに来て

「ゴメン。ぼーっとしてた」

「誰だつてあるさ……もちろん俺だつて」

最後に呟いて晩飯を食べて就寝した。

「早くしないと置いてくぞ」

「待てよ」

シュウが先に行ったりリョウを追いつけてきた。

バックを持って電車に乗った。窓には、戦車やらなんやら武装している。刀持ってくれば良かったかな？

教室に入っても何も変わらないただシュウの回りには、二人の映像作るなんだっけ？部活仲間が居て揉めていた。だがシュウは、軽く苦笑いでスルーしていた。

俺は、机に伏せて空を見ていた。ああ平和だな…変わらない日常…飽きてきた。

放課後になるとシュウが机に来て

「すまん。僕帰るの遅くなる」

「暇だし付いていっていいか？」

「ああ。大丈夫」

映像部？そこは、元危険地域の名残がある建物でパソコンとイスと机しかない場所だが秘密基地には、凄いいい場所だ。

二人は、金網の間を通り抜け歩きにくいタイルを歩いた。前は、転んだがもう慣れた。

建物に入る前に「~~~~」と歌が聞こえた。何処かで聞いた事のある美しい歌。

そこには、天使のような肌で回りの草の一本一本が輝いて見える。太陽の光が彼女を祝福している。ようだった。

「いのりさん？」

シュウは、そう呟いた。確かに見た目は、エゴイストのいのりだが果して本人だろうか？

シュウは、歌っている所に近づこうとすると

カンッ！

地面に空き缶があり蹴ってしまった。直ぐさまちっこいロボットが手からワイヤーアンカーをシュウの脚に巻き付けた。

いのりさんは、驚いて後ろに下がって机に頭をぶつけていた。

「シュウが悪い」

「うっ！」

何か女の子を襲ってるみたいになってるし…

そして何故か目を限界まで開いて俺を見ている。何事？

「兄さ…リヨウ？」

………兄さん！？そして何故か名前を知っている。

「俺って名乗ったか？」

グウー！

「「………おにぎり食べる？」」

思わずシュウとハモってしまった。

いのりさんがおにぎりを食べ終わると

「リヨウ…だよね？…葬儀社の」

「葬儀社？テロに参加した覚えは、ないけど？」

シュウは、軽くいじけて映像編集している。

「ロンド橋落ちた落ちた。ロンド橋落ちた落ちた落ちた。」

急に悩んだように歌い始めるいのりの前で座っていると

「出来るようになった…リョウが教えた。」

「あやとりか…すまん覚えてない」

「戻ってガイに渡さないと…」

立ち上がるうとするいのりの右肩には、弾丸が掠っていた。俺は、ワイシャツの袖を破り包帯変わりに巻き付けた。

「懐かしい…？」

そんな感覚が頭から出てくる。今までに内早さで何かが頭で弾けた。

ザザザッ！

するとG H Qらしき人間が俺達を囲んだ。いのりは、直ぐさま二階から一階に下りて兵士に向かうが

「うつ……」

銃の持ち手で殴られていた。「君達学生か？」

「は、はい」

シュウが答えると

「このテロリストと何をしていた？言わなければ殺すぞ。」

「いえ、僕らは、映像編集していましたし……」

兵士長の男は、「このテロリストめ！」と言っているのを蹴った。

また何かが弾けた。今度は、完璧にバラバラに！

スンッ！

と移動して落ちていた鉄パイプを拾った。「抵抗意識を確認。民間人の殺害を許可する！！」その時すでに鉄パイプを振り上げたりヨウが立っていた。兵士の銃が全て空に浮いていた。

「待て民間人の少年よ…友達が死ぬぞ」とナイフをシュウに突き付けていた。

「くっ！」

ここで俺が捕まれば状況は、さらに悪くなる。

チラッと目に付いたのは、さっきシュウが鳴らした空き缶だった。勝負は、一回狙うは、ハゲの頭…いける！

強靱脚力で空き缶を蹴ると見事にナイフに直撃してナイフは、音を立てて転がっていく。

ガチャンシャラララ！

俺は、懐に入り落ちたナイフをハゲ頭の腕に突き刺した。血が溢れ出して顔に少量の血液が付着した。

「こ、ここは、引かせて貰おう」

フラフラしながらハゲ頭は、撤退していた。

「逃がすか！ハゲ」

鉄パイプを持ち追い掛けようとする銃弾の嵐が飛んできたので遮蔽物に隠れた。くそ助けられない！

「ふふふっ死ねテロリストめ！」

と言いながらハゲが手榴弾を投げてきた。俺は、それを爆発させないように鉄パイプで飛ばした。

「ちょっと思い出した。俺、刀使いとか何とかアンティークマニアやらなんやら呼ばれてた気がする。」

手榴弾を弾くトレーニングは、小さい時からやっておりその部分の記憶が溢れ出した。

「くそつ僕は、何も出来なかった！」

「シュウ……」

しっかりしろ！！まだやることがあるだろ。いのりの守ったそれを
地図の示す場所に行って見てこい！」

「リヨウ…俺は、……………」

「たまには、お前らしくないことやれよな」

「僕らしくないことをやればいいのか？」

「自分のやりたいと思ったことをしてこい」

S i d e シュウ

僕らしくないこといったいどうすればいいんだ？悩んでも仕方ない
行くしかないんだ！

「じゃあ俺は、いのりの捕まった場所を探して来る。頼んだぜ」

「分かった！」

行かなきゃ彼女が守ったこの試験官のようなのを守らなきゃ！俺は、

葬儀社の方へリヨウは、いのりを探しに…

S i d e O u t

S i d e いのり

「さあ言え！貴様らのリーダーは、誰だ！」

目隠しされてわからないが車のような物の中だ。

「まだ言わんのかい！」

バチン！とバタフライナイフをいのりの頬に当てた。

「……………」

私は、言わない…死んでも失いたくない人が居るから…でもリヨウには、会いたいもう一度だけ。例えば忘れていても弱くてもあの人は、絶対にくる。

離れていても一緒だから…

「指令！」

「なんだ！？」

イライラしていて声がでかい耳が痛くなる。

「鬼人です。鬼人があの時の悪魔が生きていました！！！」

「なにい！？あの百人斬りの奴は、死んだはずじゃ！？」

司令官が焦る。

「全部隊鬼人の討伐に迎え！！」

S i d e O u t

S i d e リヨウ

今、黒い刀を腰に刺し黒いコートを着ていた。それは、あの時の事を再現するかのように思えた。

あの時？

ああ思い出した。そんな事したら記憶喪失したんだっけな？

ゾロゾロと人型兵器までもが投入された。さあやってみようか…葬儀社がくるか来ないか果してどっちだろうね。

人外の脚力で走り出す。それは、人型ロボットと同等のスピードを出していた。

「シッ！」

居合斬りを人型ロボットにかました。

S i d e O u t

S i d e シュウ

地図の表示してある場所は、広場のように広く巨大なマンホールが中央にある広場。

パパパッ！

ライトが一斉に光僕の視界を埋め尽くす。光に慣れて目を開けるとクールでイケメンなイメージと外国人の白人の美形の青年に

「お前が桜馬 シュウか？」

「はい。一応…貴方がガイですか？」

「そうだ。では、聞こう今暴れてる。鬼人とは、誰だ！」

「桜馬 リョウ…」

S i d e O u t

S i d e ガイ

何？今こいつは、前に死んだ葬儀社の英雄のような人間の名前が出てきた。

【細胞兵器奪取計画】の土台となり死んでしまったはずの男。あいつが生きてる可能性は、限り無く低い…それにあのリョウが定時連絡を忘れるわけがない。

「リヨウは、一年前に川で拾った母が彼を息子にしちゃおうってな
って養子になりました。」

とんだ性格の母親らしいがまあ自分の目で見なくちゃ話にならない

「葬儀社は、これより行動を開始する。」

始まり（後書き）

CDリポートだぜ。

救出と力（前書き）

寒い…手がかじかむ

救出と力

燃え盛る建物が体のアドレナリンを促進させる。何とも恐ろしい光景だった。

一個人の人間が兵器に勝利すると言う結果が彼の強さを証明していた。

度重なる戦闘でコートは、黒く刀は、どす黒い色をしている。建物は、炭化して当たりには、鉄屑が散っていた。日本刀【黒燕】は、鉄を斬ることも容易く切り裂く可能にしていた。今日の空は、朱い真っ赤だ。

遠くからモーターの回る音とローラーの回転の音がした。

バンッ！

巨大な鉛玉が発射される音がした。それは、反射的に出された刀に切り裂かれたが次は、三発のミサイルが飛来してきた。バックステップで一つのミサイルを回避して二つのミサイルを日本刀で真っ二つにする。

『なっ！？』

謎の音声が流れて驚いているのが分かる。何か聞いた事のある声の気がした。一瞬風が強くなりフードが脱げる。

『……………』

急に大人しくなりゆっくり銃口を下ろした。

『貴方……リヨウ?』

「んっアヤセか?」

『生きてたの!?!』

「話は、後だ…来るぞ!」

ギャリリリリ!

鉄の擦れる音を出しながら敵の機体がアヤセ機体に突撃する。

『つつ!』

この機体は、ダイレクトで搭乗者と繋がっていて機体に損傷があると搭乗者もダメージを受けるシステムらしい学校で習った。

俺は、アヤセの機体を踏み台に弱点と思われる頭部のコードを刀で斬った。人間にしたら首の頸動脈である場所を無情に切り裂いた。

茶色やら黒やらの液体ががコードから溢れ出し搭乗者の悲鳴を残して機能を停止した。

『ありがとう次行かないと…』

「機体の損傷が多すぎる。撤退しろ」

『でも!』

「冷静な判断をしる。今の状態で機体を壊すわけには、行かないだろ？」

『……………分かった。撤退する。』

「その前にいのりが近くに居るはず何だが見てないか？」

「いのり？分かったツグミに伝えとく」

アヤセの機体を見送り次の軍隊の密集地区に走った。

S i d e アヤセ

一年前に彼は、死んだはずだった。細胞兵器の奪取のデータ集めの時に単独潜入でデータを送ったのち死亡。とツグミのハッキングで判明していた。G H Qの高いレベルの機密『ボイドゲノム』と呼ばれる兵器の時だ。

彼は、優しい。それは、葬儀社で一番と言って言いくらいのお人よしだった。一年前だって任務の日にもいつも通り笑っていたがたまに寂しそうな表情をしていた。だが部屋で盗み見た彼は、人間なのかわからないくらい怖かった。刀と言うアンティークと呼ばれるくらい古い刃物を使う少年。「頼むよ母さん……」この言葉に少なからず私は、驚いた。彼の弱った姿を見るのは、初めてだからだ。

彼だって死にたくないだろう……………

そして次の日に彼は、居なかった。
それから一年が立ち私は、この子（機密）を使って戦場を駆け回った。そして出願許可が出て何時間立ったかわからなくなった頃に黒い格好の人が現れた。

腰には、刀。様子見に銃を一発撃つと避けることをせずに弾丸を切り裂いた。

「くらえっ！」

背後のミサイルを展開して三発のミサイルを放った。それをバックステップで避けると刀を使いミサイルを切り裂いていた。

私は、驚いて声が出た。すると黒いフードが外れて素顔が現れた。
その人は、誰よりも優しく誰よりも強い少年だった。

S i d e O u t

S i d e シュウ

葬儀社に行つて事情を話していると「敵襲だ！」全員が銃を持ち応戦に行く。

何も出来ない…どうすればいいんだ。やれることは、「シュウ！！
今度こそ守って見せる！」

そうだ。やらないと変わらない。『自分らしくないことをやるんだ』
僕は、走り出した。

S i d e O u t

S i d e いのり

いのりの車は、ミサイルの直撃でひっくり返っていた。運が良いの
だろう手の拘束具を外して目隠しを取ると真っ赤な空が彼女を照ら
していた。

全体を見渡す為に瓦礫を上ると

二体の人型の機体がいた。二体の機体の一体が気づいた。

カチャ

銃口がこちらを向いて引き金に指が掛かると

「いのり!」

そこにリョウが来た。今、会いたかった人が走って来る。

間に合わない。どちらかが死ぬ。死ぬなら立場的には、わたしだ。
だが彼は、私を庇った。何年立っても変わらない。

S
i
d
e
O
u
t

救出と力（後書き）

暇あれば投稿

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9966y/>

仲間思いの刀使い

2011年12月1日14時49分発行